

# 甲骨文「婦好卣子」攷

高久由美

## On “Shang Princess Fugao’s parturition” in oracle bone inscriptions

Yumi TAKAKU

はじめに

洋画家にして書家でもあった中村不折(1866～1943)は、その生涯を通じて自らの書道研究のために甲骨、青銅器、碑拓、法帖など、出土文字資料を中心とした、中国や日本の古文物を蒐集し続けた。昭和11年(1936)には現在の台東区根岸に自ら書道博物館を開館し、これら蔵品を一般に開陳した。現在は建物、蔵品ともに東京都台東区に管理が委ねられ、台東区立書道博物館として1万6千点に上る中村不折コレクションを収蔵し続けている。

本稿で採り上げたのは、そのうちの一片の牛肩胛骨で、契文は第一期に典型的な大字で刻されている。かつて郭沫若が二度目の日本滞在中に編纂した『卜辞通纂』(1933年刊)の中で、「中村獸骨」として骨の正面及び背面の写真を紹介した一片である<sup>1</sup>。郭沫若はこれに先立って田中慶太郎に宛てた1932年8月17日付の書簡の中で、

（『卜辞通纂』執筆にあたり）河井仙郎氏と中村不折氏所蔵の未著録品も一緒に入れようと思ひます。両氏への交渉は老兄引受け下さい。或は老兄と同道で僕は行って折求しても宜しい。

と依頼して、甲骨の調査に際して田中氏の協力を得たことが記されている<sup>2</sup>。『卜辞通纂』には若干の縮小が施された写真が掲載されたが、拓本は公刊されなかった。その後まもなく、金祖同が来日して中村氏の甲骨を採拓する機会を

得たが、金氏は著録した286片の甲骨の中で「猶ほ婦好卣子一版を以て、最も得難しと為す」と特に該骨の希少さを記し、原寸大の拓本が『殷契遺珠』(1939年刊)に収録されるに至った。一方、金氏は実見した骨については「骨質至って脆けれども、中村氏慨然として拓に借す。甚だその厚誼に感ず。」と記し、既に1930年代に骨の状態が極めて脆弱であったことも指摘している<sup>3</sup>。その後、該骨は館内のガラスケースに保管されたままの状態であったらしく、1958年から数年にわたって、青木木菟哉氏が当時の館長であった中村丙午郎氏の許しを得て、書道博物館の甲骨を摹写する機会を得た際も、調査の結果公表された摹本350点の中に中村獸骨は入っていない<sup>4</sup>。ようやく最近になって、2008年3月に開催された謙慎書道会展70回記念「日中書法の伝承展」において、中村不折旧蔵甲骨の一部が出陳されることになり、該骨の実物と拓本が並んで展示されるに至った<sup>5</sup>。この記念展の図録で公刊された拓本は、今回の展覧のために新たに作製された新拓であるため、『殷契遺珠』の拓本と比較すると、剔泥されてかなり明晰なものとなっている。また、新たに撮影された原寸大のカラー写真が加えられたことにより、拓本では不晰な文字も悉く見えるようになった。（文末の付図は、新拓に依拠して、カラー写真を適宜参照しながら筆者が作成した摹本である。）

該骨の刻辞にある一句「婦好卣子」の「子」につ

いて、羅振玉は『説文』𠂔字に比定してほうきを逆さにして立てた形であると説き、歸の仮借字であると解し<sup>6</sup>、董作賓も𠂔を歸と釈し餽送の餽として読み、兵器を辺境に餽送することと解した<sup>7</sup>。しかし、郭沫若はト辞の𠂔の用例を体系的に分析し、帯は婦の省であるとし、ト辞の「婦某」は殷王の妃嬪・世婦の属であるとの見解を示した<sup>8</sup>。ほぼ時を同じくして、唐蘭も辞例から𠂔は婦であるとし、さらに郭沫若の説についても「その帯を読みて婦とするにおいて、深く余が懐を契す」と述べて同意を示し<sup>9</sup>、これ以降、帯は婦の省で、王の配偶者を表す語と解されている。「帯好𠂔子」は、武丁の配偶者の一人であった婦好という女性の、「𠂔子」すなわち懐妊についての一連の貞問である。

一九七五年、殷墟で殷墟五号墓(殷墟婦好墓)が未盗掘の状態で発見され、墓葬から「帯好」の銘を帯びた多数の青銅器が出土したことから、この墓が婦好の墓であることが決定的になり、この女性の実在性と重要性が考古学的に再検証された<sup>10</sup>。ここで改めて、この「帯[婦]好𠂔子」を刻す完整骨版に近い甲骨資料に刻された一連のト辞を整理・検討して、その具体的な内容とそれにまつわる一連の貞問に解釈を施し、そこから派生するいくつかの問題について、考察してみることにする。

# 一 中村獣骨刻辞の内容

正面の刻辞は、以下に記す通り全部で五段からなり、辛丑の日から乙卯の日まで、15日間にわたる貞トである(図1)。

- (1)辛丑ト、殷貞、帯[婦]好𠂔子? 二月  
辛丑(の日に)トし、殷貞ふ「婦好に子あらんか?」二月。
- (2)辛丑ト、亘貞、王固曰:好其𠂔子。𠂔[御]。  
辛丑(の日に)トし、亘貞ふ。王固ひて曰く「好其れ子あるべし。」御なり。
- (3)壬寅ト、尙貞、若兹不雨、帝佳兹邑寵? 不若[諾]。二月。  
壬寅(の日に)トし、尙貞ふ「若し兹れ雨ふらざれば、帝はこれ兹の邑に寵をたまわらんか?」[帝は]諾せず。
- (4)甲辰ト、亘貞、今三月、光乎来?王固曰:其

乎来。气至佳乙。旬𠂔二日乙卯、允𠂔来自光、以羌芻五十。三月。

甲辰(の日に)トし、亘貞ふ「今三月、光より来たらんか?」王固ひて曰く「それ来たるべし。これ乙(の日)までに至るべし。」

旬ありて二日(後の)乙卯(の日に)、まことに光より来たるあり、羌芻五十をもたらず。三月。

- (5)乙卯ト、尙貞、平帯[婦]好𠂔𠂔于妣癸?

乙卯(の日に)トし、尙貞ふ「婦好をして妣癸に𠂔を𠂔せしめんか。」

(1)は前辞と命辞で構成され、ト日辛丑は六十干支の第三十八。第一期癸組の貞人である殷が、武丁の配偶者である婦好に子があるだろうかという貞問をしている。文末には二月と記される。

「婦好𠂔子」を貞問するト辞は「帯好𠂔子。四月。帯好母其𠂔子。」(合集 13927)、「𠂔亥ト、殷、貞帯好𠂔子。」(合集 13928)、「[帯]好𠂔子。」(合集 13929)、「𠂔辰[ト]、殷、貞帯好𠂔子。」(合集 13930)などがあるが、残辞が多く、中村獣骨の如くある程度纏まった内容をもつものは稀少である。他には、京都大学考古学教室所蔵甲骨があり、これがかつて郭沫若が『ト辞通纂』別録二に写真を掲載した。ト辞には、

庚子ト、殷貞、帯[婦]好𠂔子? 三月。

辛丑ト、殷貞、兄于母庚。

庚子(の日に)トし、殷貞ふ「婦好に子あらんか?」 三月。

辛丑(の日に)トし、殷貞ふ「母庚を兄せんか?」

とあり、中村獣骨と同じく貞人殷がトしている。両版の骨の形状を比較すると、中村獣骨が牛肩胛骨の骨臼部分を含む上部四分の一を欠いているのに対し、京大蔵骨は正に中村獣骨の脱落部分である。中村獣骨のト日である辛丑と京大蔵骨のト日である庚子は連続する2日間であるため、曹定雲氏は京大甲骨の庚子の日の貞トの翌日に、中村獣骨の貞トが行なわれたのだとした<sup>11</sup>。一見すると連続性があるように思われるが、曹氏は庚子の日が二月、辛丑の日は三月という前提で、二日間連続して貞トがおこなわれ

たとしたが、兩版の卜月を比較すると、京大蔵骨には庚子の日が三月、中村獣骨には辛丑の日が二月とあるので、庚子の翌日である辛丑が二月ではありえない。したがって、これらの貞問は別々の年に卜されたものであると判断せざるをえず、曹氏の説はその前提条件が成立しないことになる。

(2)も同日に卜したもので、亘も第一期方組の貞人であるが、卜辞の構成が特殊で、前辞に続く命辞を缺き、王の繇辞が前辞に続くという形式をとる。「好其れ子あるべし」という繇辞から、貞トの内容は(1)と同じく、婦好に子があるのだろうかをうらなったものと推測される。繇辞に続く𠄎について、曹定雲氏は『殷契遺珠』の拓本に依拠して左側の1画は無く𠄎であるべきと主張し、該字を「御」とするのは誤りで前の子字と連言して「子𠄎」で婦好が産んだ子と解し、「好其れ子𠄎あり」と句読して、『史記』殷本紀の夭折した武丁の子・孝己に比定した<sup>12</sup>。しかし、2008年公開のカラー写真を見れば、やはり左側に1画があることを確認できる。また、背面刻辞(㊦)の王の繇辞にも、吉に続けて単独で、𠄎とだけある。子と𠄎の間で刻辞が改行されていることから、やはり子𠄎が連言されているわけではなく、𠄎すなわち𠄎が単独で用いられている驗辞と解すべきであろう。おそらく占トの結果を表しているものと思われる。𠄎の解釈について、晴雨や往来亡災を占う卜辞を参照してみると、貞トの結果を表す語として命辞や繇辞の後に続く。例えば、

戊寅卜、貞、今日王其田𠄎、不遘大雨？  
𠄎。(前 2.28.8)

戊寅(の日に)トし、貞ふ「今日、王それ𠄎に田す。大雨にあわざるか？」𠄎。

戊寅王ト、貞、田𠄎往来亡災？王固曰：吉。  
𠄎𠄎。𠄎(獲)鹿四。(前 2.35.1)

戊寅(の日に)王トし、貞ふ「𠄎に田す。  
往来災ひなきか？」王固ひて曰く「吉。」

𠄎𠄎。鹿四を𠄎(獲)たり。

前 2.35.1 では、田𠄎の結果、鹿4頭を得たことも記されており、このことから、「𠄎𠄎」は吉と同じように、命辞で問われていた通りの結果になった、という意味を表わすと考えられる。

(3)の卜日である壬寅は、六十干支の第三十九、即ち婦好に子があるかを卜した翌日に、貞人方によって行なわれた貞トで、辞末に「二月」と月名も記されている。命辞の前半の「若𠄎不雨」は、「もしも雨が降らなければ」という仮定を表しており、𠄎は、郭沫若の指摘する如く𠄎の異体字で<sup>13</sup>、寵の仮借字として読み、帝がこの邑に寵恵をお与えになるだろうか、と解してよいだろう。もし雨が降らなくとも天帝の恵みが与えられるか、との貞問に対する、文末の一句「不𠄎」は、帝が寵恵を与えることを承知しないの意で、不吉、不祥を示している。

(4)の卜日である甲辰は六十干支の第四十一、即ち第4日目の貞トである。貞人は(2)と同じく亘で、命辞に「今三月」とあることから、(3)の壬寅の日が二月末で、翌々日の甲辰の日には月が替っていることがわかる。ここでの来は、貢納または餽遺の方法を現す動詞で、属国である光の国からの貢納品が到来するかいなかを占うものであろう。卜辞の辞例によれば、貢納されるのは動物や、農産物、俘虜等である。繇辞の「其乎来」は、それ来るべしとして、光国からの貢納があることを予言する。郭沫若は次の三を川と積すが<sup>14</sup>、气と積して「～迄に」の如く解すべきであろう。従って「气至佳乙」は、光国からの貢納が乙の日までに到来するだろう、とその日時を予言するものである。果たして、これに続く驗辞で、予言通り甲辰の日から十二日後の乙卯の日に、光国からの貢納が到来したことが記される。さらに「𠄎𠄎𠄎五十」とあり、この度の貢納品は𠄎𠄎で、数量は五十と記される。𠄎は動詞で、貢納品がもたらされたことを表す動詞である。𠄎は殷人に対する方国であると同時に、最も多く見られる俘虜である。𠄎も卜辞にしばしば登場する語で、

有告曰：有亡𠄎自益十人有二。(菁 3)

告げるありて曰く「益(の国)より逃亡せし𠄎あり、十二人あり」

の如く𠄎の逃亡に関する辞例からは、𠄎には俘虜・奴隸の意味があることがわかるし、

己丑卜、設貞：即𠄎𠄎其五百佳六？

貞：[即]𠄎𠄎不其五百佳六？(丙 398)

己丑(の日に)トし、設貞ふ「即それ𠄎五

百六をもたらさんか？」

貞う「[即]それ芻五百六をもたらさざるか？」

の如く芻の数を記す辞例からは、五百六という数の多さからいって、おそらく家畜であろうと推測される。芻芻については、姚孝遂の如く羌人の牲畜と解する説と<sup>15</sup>、羅琨、楊升南の如く俘虜と解する説とがある<sup>16</sup>。ト辞で芻芻を連言する辞例は、該骨の他に『庫方二氏蔵甲骨ト辞』所収の甲橋刻辞の背面に、

之日芻至告，甶来 𠄎 芻芻。

この日芻至りて告げる「甶より(貢納が)来り芻芻をもたらすべし。」

とあるのが基本から確認できる。甲橋刻辞であるためか、『英国所蔵甲骨集』所収の拓本からでは認識しえない<sup>17</sup>。いずれにしても、芻芻と連言するのは極めて少ないが、婦好の懷妊の貞トから始まる一連の貞トにおいてその意味を考えてみると、続く(5)で執り行う祭祀で𠄎という俘虜を人牲として捧げていることから、光よりもたらされた「芻芻五十」は動物ではなく奴隸であったと解するのが妥当だろう。冒頭の婦好懷妊の貞トから 15 日目に、人牲となる俘虜がもたらされたことになる。

(5)のト辞は「芻芻五十」の貢納の到来を受けて、同日に貞問されたものである。ここでの 𠄎は「婦好をして～せしむ」という使役構文と解すべきである。また、動詞𠄎と目的語𠄎の組合せは、先妣に対して人牲𠄎を奉げて行なう祭祀を意味する。婦好に、先妣・妣癸に対し光国からもたらされた人牲を捧げて、𠄎祭をとりおこなわせた。𠄎祭は、子が授かるであろうか、という一連の貞トの終りに位置付けられるものと考えられる。また、武丁の先妣で廟号を癸とするのは、中丁、祖丁の配妃であるが、ここでの祭祀対象とされる妣癸はそのいずれかであろう。

また、背面にも刻辞があり、正面の刻辞との関連を窺わせるが、ト日がないうえ、残辞が多く、刻文不全であるため文意を把握し難い箇所がある(図2)。

(イ)王固曰：吉。𠄎[御]。

王固ひて曰く「吉。」御なり。

(ロ)王固曰：甶庚受。

王固ひて曰く「庚において授かるべし。」

(ハ)丙申王 𠄎 固光，ト曰：不吉。𠄎𠄎。𠄎

丙申(の日に)王尋(かさ)ねて光(国について)固ふ、トして曰く「不吉。わざわざあるべし。」𠄎

(ニ)王固曰：帝隹茲邑寵。不若[諾]。

王固ひて曰く「帝これ茲の邑に寵をたまわるべし。」[帝は]諾せず。

(ホ)…称齒。五月。

(ヘ)…乎来。

(イ)は、王による繇辞「吉」に続いて𠄎とある。

𠄎の語は正面(2)と同じで、吉と出た結果、命辞で貞問された通りになったことを表わす語と思われる。正面(1)の貞問「婦好に子あらんか」に対する驗辞と考えれば、望みどおり子が授かることを意味するものかもしれない。

(ロ)は王による繇辞である。「庚において」とあるのは、庚の日に授かるであろう、との予言と考えられる。これに対応する、動詞・受(授かる)を含み「～を授からんか」という内容の命辞は、正面背面いずれにも見えないが、正面(1)(2)の「婦好に子があるだろうか」の貞問に対するものと考えるのが妥当だろう。未だ懷妊が確認されていない婦好について、庚の日に子を授かったことがわかるであろう、と懷胎を予言するものと解せる。子を授かる意の動詞として、正面では𠄎が、背面では受が用いられていることになり、𠄎子と受子の二語が互用関係にあると言える。

(ハ)のト日である丙申は、六十干支の第三十三位である。正面の貞問が第三十八位の辛丑の日に始まってから、癸亥におわり再び甲子にもどったことになるので、貞問の開始からすでに五十日以上を経過している。一般的に、繇辞の始まりは「王固ひて曰く…」であるのに対して、ここでは「王 𠄎 固光ト曰」という表現がとられており、語法的にどのように解するか問題であるが、𠄎について、李学勤が長子口墓出土の青銅器に記された「子口 𠄎 乍(作)文母乙彝」という銘文にある 𠄎 字を尋に比定した上で、「尋作」は「重ねて作る」の意で、𠄎を状語と見做した

説は一考に値する<sup>18</sup>。松丸道雄先生も李氏のこの解釈に対しては是非を判断しがたいとしながら、この文脈で𠩺が「子口𠩺」として固有名詞となる可能性はあるまいとしている<sup>19</sup>。𠩺を「再び」、「重ねて」、「改めて」等の意味の固に対する状語と考えれば、「王𠩺固光ト曰」は、王が、正面に引き続き、再び属国光についてうらなったことを表わすものと言えよう。その結果が「不吉、わざわざあるべし」ということは、光国について、正面のト辞に奴隷である羌芻五十人の貢納があったことが記されているので、貢納から四十日余り後、関係が悪化することを予言するものであろう。

(二)の繇辞は、正面(3)の雨が降らなくとも天恵を給うだろうか、という貞問と対応するものであろう。「諾せず」は帝が寵恵を与えることを承知しなかったという内容を表す驗辞であろう。

(ホ)及び(ハ)は残辞のため文意は不明だが、五月とあるのは、正面の辛丑、壬寅の日が二月末であるので、(ハ)の丙申の日は四月下旬になろう。(ホ)及び(ハ)はさらに時間が経過してから記されたト辞の残辞であるとすれば、月名が五月になることもありうる。

## 二 甲骨文における生育に関する表現

### (1) 奉生

甲骨文における生育に関する貞問には、出子以外に、𠩺生、受生の貞トがある。𠩺字は奉の原形で、祈る意の動詞で、ト辞では他に𠩺年、𠩺雨の貞トにも現れる。受生の受字は授かる意の動詞で、やはり受年の貞トにも表われる。陳夢家は、奉生と受生のト辞は、農作物の収穫をうらなうト辞の奉(=祈求)年と受年に相当し、奉生は「子を求める」の意で受生は「子を有す」の意であるとした<sup>20</sup>。

貞、帝不我[受][年]。

□卯ト、韋[貞]、[帝][受][我]年。(京人 0137)

貞う「帝我に年(みのり)を授けざるか？」

某卯の日にトい、韋貞う「帝我に年(みのり)を授くるか？」

貞、奉年于岳。(京人 0139)

貞う「年(みのり)を岳にいのらんか？」

これらのト辞は、農作物の収穫を神に祈求し、稔りの収穫を授かることができるかどうかを貞トするものである。胡厚宣によれば、農業においては奉年の後に受年の貞トがあり、これと同じく、奉生をトした後に受生についてもトすのだという<sup>21</sup>。

ところが、奉生、受生のト辞は、奉年、受年のト辞ほど用例が豊富ではなく、また、奉年、受年の辞例のように対応関係にもない。

武丁期の奉生のト辞は、受生と対になるような貞トの形式にはなっていない。

□□ト、争貞、奉王生于𠩺(妣)庚于𠩺(妣)丙、二月。(懷 71)

□□トし、貞ふ「妣庚と妣丙に王生をいのらんか？」二月。

…貞、奉王生、宰于𠩺(妣)庚于𠩺(妣)丙。(遺珠 30)

貞ふ「王生をいのらんとして妣庚と妣丙に宰せんか？」

懷 71 には貞人争の名が見えることから賓組ト辞であることがわかる。遺珠 30 には貞人名は記されていないが、書体から午組ト辞ではないことはわかる。これらの二例に共通する点は、動詞奉の目的語が王生で、「王生をいのらんか」と貞問している点と、祭祀対象となる先妣が妣庚と妣丙であることの二点である。遺珠 30 から、奉生の祭祀には羊を犠牲に献じることともわかる。

戊申ト、奉生五𠩺(妣)于𠩺(妣)壬父己(乙 1704)

戊申(の日に)トす「五妣と父己の(配偶である)妣壬に生をいのらんか？」

乙未ト、于𠩺(妣)壬奉生。(乙 4678)

乙未(の日に)トす「妣壬に生をいのらんか？」

乙 1704 と乙 4678 はいずれも武丁期のト辞ではあるが、午組ト辞であることが陳夢家によって指摘されている<sup>22</sup>。ト辞のシンタックスも、王賓ト辞は「奉王生」とあるのに対し、「奉生」で、祭祀対象とされる妣壬も、明らかに王賓ト辞の祭祀対象とは異なる。この他に、ト辞全体としてみた時、一群をなす奉生ト辞がある。

庚辰、貞、其奉生于妣(妣)庚(妣)丙、才(在)且(祖)乙宗  
辛巳、貞、其奉生于妣(妣)庚(妣)丙、牡牝白豕(拾 1.10)

庚辰(の日に)貞う「それ妣庚と妣丙に、祖乙の宗に在りて生をいのらんか？」  
辛巳(の日に)貞う「それ妣庚と妣丙に、牡牛と牡羊と白豕をもって、生をいのらんか？」

乙巳貞、丙午彫、奉生于妣丙、牡三牝一。  
(京人 2300)

乙巳(の日に)貞う「丙午(の日に)彫し、妣丙に、牡牛三と牡羊一をもって、生をいのらんか？」

これらは、かつては武乙ト辞と称され、董作賓によるト辞の五期区分法において第四期に分類されていたが、現在は歴組に分類される一群のト辞である<sup>23</sup>。賓組や午組とはことなり「奉生于」という、一定の形式をもつ。祭祀対象となる先妣は、王賓ト辞と同じく妣庚と妣丙であり、牡牛や牡羊などの動物犠牲を供する点も共通している。

このように、奉生のト辞は、貞人集団によって王賓ト辞、午組ト辞、歴組ト辞の三群に分けることができ、祭祀対象や文例、書体に大きな違いがあることがわかる。ただ、三群いずれにも共通しているのは、貞問対象として婦某の如き武丁の配妣であることを示す固有名詞が記されない点である。出子をはじめ、後述する受生や冥の貞トでは、婦好、婦姁など、必ず武丁の配妣の名が記されるのに対して、奉生の貞トには配妣を示す固有名詞はなく、祭祀対象である先妣の名のみが記され懐胎が祈願される。特定の配妣の名が記されない点から、この貞トの段階ではいずれの配妣が懐妊してもよいと考えられている、と理解してよいだろう。

## (2) 受生

受生の辞例は、ト辞全体で二例しかない。そのいずれも賓組ト辞であり、貞トの対象は婦好である。その一片が中村猷骨であり、もう一片が董作賓『殷墟文字外編』所収の何叙甫旧蔵骨で、文字は中村猷骨とよく似た、典型的な第一期の賓組ト辞である。

丁酉ト、方貞、帚[婦]好出受生？

王固曰：吉。出受生。(外 141、外 144)




丁酉(の日に)トし、方貞ふ「帚[婦]好生を受くるあらんか？」


王固ひて曰く「吉。生を授かるあるべし。」



前辞と命辞が正面に刻され、繇辞は背面に刻され、婦好の受生が予言される。丁酉は六十干支の第三十四位。中村猷骨の辛丑の日は第三十八位なので、「出子」の貞トの四日前に「受生」が占われた可能性が有る。このことから、受生が貞問されて吉と出た後で、出子が貞トされていると考えてよいだろう。農作物の収穫をうらなう奉年と受年の関係から類推すれば、あるいは、受生の貞トの前に、奉生が貞問され奉生のための祭祀が行なわれた可能性もあるが、ト辞には用例は見い出せない。



「受生」について、陳夢家は「子を有す」の意であり、冥であるとして、ト辞における受生と出子と冥を同一視しているが<sup>24</sup>、妊娠から出産にいたるプロセスは約十ヶ月と比較的長期にわたるため、それぞれの表す意味が同じであるかどうかについては、ト辞の用例を比較して検討する必要がある。以下ではト辞の冥を取上げて検討を加えたい。



## (3) 冥


第一期武丁ト辞には、婦某のを貞問するト辞がまとまって出現する。その辞例の特徴は、しばしばがとともに連言されて貞トされる点である。例えば、


壬寅ト、設貞、帚[婦]好。


貞、帚[婦]好不其。(乙 6310)


壬寅(の日に)トし、設貞ふ「婦好するにならんか？」



貞う「婦好するにならざるか？」

己丑ト、設貞、翌庚寅帚[婦]好。

貞、翌庚寅帚[婦]好不其。一月。(続 4.29.2)

己丑(の日に)トし、設貞ふ「翌(日の)庚寅(の日に)婦好せんか？」

貞す「翌(日の)庚寅(の日に)婦好せざらんか？」一月。

丁巳ト、争貞、帚[婦]好。不其。十

月。(虚 2361)

丁巳(の日に)トし、争貞ふ「婦好𠄎するに𠄎ならざらんか？」十月。

壬戌ト、宀貞、帚[婦]好𠄎𠄎。(佚 556)

壬戌(の日に)トし、宀貞う「婦好𠄎するに𠄎ならんか」

壬子ト、争[貞]、帚[婦]好[𠄎][𠄎]。(甲 3485)

壬子(の日に)トし、争[貞]う「婦好𠄎するに𠄎ならんか」

郭沫若はかつて骨白刻辞の文例を分析した際、これらを王の配妣の出産を貞問するト辞と考え、𠄎を向と𠄎(=攀)からなる𠄎の古文で、出産する意の動詞とし、𠄎は契の省で嘉の意とした<sup>25</sup>。唐蘭も𠄎を𠄎とした郭説をト辞研究における重要な貢献と評価しつつ、𠄎の結構について両手で巾を以て物を覆う象形であると分析し、本義は幪(おおう)であることから𠄎字を冥(くらい)に隷定した<sup>26</sup>。唐氏は冥が分娩の意で用いられるのは、嫔の仮借として用いられていると考えたのである。郭沫若もその後記した考釈においてはやはり𠄎を冥と釈している<sup>27</sup>。婦某冥𠄎の行為をある種の祭祀儀礼と考える説もあるが<sup>28</sup>、やはり郭沫若や唐蘭の説の如く、王の配妣の出産行為を意味する動作と考えて解釈するのが妥当であろう。ただ、𠄎は『説文』に「𠄎、生子免身。从子从免」とあるものの、甲骨文𠄎字との字形的連続性が十分に説明されていない。その後、金祥恒が文字学的に該字の字義や字形を再検討し、『説文』に「𠄎、生子免身。从子从免」とあるのは会意にして形声字であり、これに対して甲骨文𠄎は分娩の象形字であるとしているが、正に当を得た指摘である<sup>29</sup>。ただ、金氏は分娩の象形字と指摘するのみで、𠄎の各構成要素がどのような意味を表すかについては言及していない。文字の成り立ちを、嬰兒を覆う衣と関連づけて説明する点からすれば、唐蘭の𠄎字の本義は幪(おおう)であるという説を踏むものと思われる。しかし、実際に𠄎字の各構成要素を検討すると、𠄎字は両手で巾を以て物を覆うというよりは、女性の子宮口𠄎から胎児の頭部𠄎が出てくるのを両手が掻き出そうとしている象形と解すの

が妥当であろう。両手の向きが𠄎の如くあり、トとは逆である点も、「掻きわけろ」という行為の特徴を表しているものと思える。このことからすれば、冥には子宮口の奥方の仄暗さの含意があるとみてよからう。

#### (4) 𠄎

貞冥ト辞における𠄎について、郭沫若が契の省で嘉の意としたのは卓見であったが、その後胡厚宣と李孝定は、相次いでそこにさらなる重要な含意を見出した。即ち、男女の産み分けである。胡厚宣は、𠄎は男児が生まれること、不𠄎は女児が生まれることを意味するとした<sup>30</sup>。李孝定も丙 247 の繇辞と驗辞から、𠄎と不𠄎は赤子の性別と関係があり、男を重んじ女を軽んずる殷人の観念を見てとった<sup>31</sup>。

以下に示す4片は、婦好の冥および𠄎を命辞とする貞トに、王の繇辞及び驗辞がともなう辞例である。

丁酉ト、宀貞、帚[婦]好冥𠄎。

王固曰、其佳甲冥、𠄎𠄎𠄎…。(続 4.29.3)

丁酉(の日に)トし、宀貞ふ「婦好冥するに𠄎ならんか？」

王固ひて曰く「それ甲(の日に)冥すれば𠄎(わざわざ)あるべし…」

甲申ト、設貞、帚[婦]好冥𠄎。

王固曰、其佳丁冥、𠄎。其佳庚冥、弘吉。

三旬𠄎一日甲寅冥。不𠄎。佳女。

甲申ト、設貞、帚[婦]好冥不其𠄎。

三旬𠄎一日甲寅冥。允不𠄎。佳女。(丙 247)

甲申(の日に)トし、設貞ふ「婦好冥するに𠄎ならんか？」

王固ひて曰く「それ丁(の日に)冥すれば𠄎、庚(の日に)冥すれば弘吉なるべし」

三十一日後の甲寅(の日に)冥す。𠄎ならず、これ女(が生まれた)。

甲申(の日に)トし、設貞ふ「婦好冥するに𠄎ならざるか？」

三十一日後の甲寅(の日に)冥す。まことに𠄎ならず、女(が生まれた)。

壬寅ト、設貞、帚[婦]好冥𠄎。

貞、帚[婦]好冥不其𠄎。

壬辰𠄎、癸巳冥、佳女。(丙 249)

壬寅(の日に)トう、設貞う「婦好冥する

に幼ならんか？」

貞う「婦好冥するに幼ならざるか？」

壬辰(の日に)𠄎して、癸巳(の日に)冥して、これ女(が生まれた)。

壬寅ト、殷貞、帚[婦]好冥幼。

王固曰：其佳[戊]申冥、吉。幼。其佳甲庚冥、不吉。𠄎。佳女。(乙 4729)

壬寅(の日)トう、殷貞う「婦好冥するに幼ならんか」

王固ひて曰く「それ戊申(の日に)冥すれば吉。幼なるべし。甲庚(の日に)冥すれば不吉にして、𠄎にして、これ女(が生まれるべし)」

続 4.29.3 以外の 3 片のト辞はいずれも亀版の上半分に対貞の形式で刻され、婦好が冥するにあたり幼なるか幼ならざるかを貞問する。これに対する繇辞が記されるのは、丙 249 以外の 3 片で、各々「甲日に冥すれば」(続 4.29.3)、「丁日に冥すれば」「庚日に冥すれば」(丙 247)、「戊申の日に冥すれば」「甲庚の日に冥すれば」(乙 4729)とあり、出産日に十干または六十干支による条件を付け、特定の日に出産すれば吉であることと、特定の日に出産すれば不吉であることが予言されている。日にちの特定に続く、吉凶に関する表現のバリエーションは、

よい	幼 弘吉 (丙 247)
	幼 吉。(乙 4729)
わるい	𠄎希 (続 4.29.3)
	不幼 允不幼 (丙 247)
	不吉 𠄎 佳女 (乙 4729)

のようになる。繇辞の内容の検討の結果、出産行為「冥」の実態の一端として、殷王室にとって、出産日がいつになるのかを判断することが、出産の成否に関わる重要事であったことが明らかになった。この成否の内容には、母体や胎児の健康安全や、男児の出生なども含まれよう。これについては、繇辞の後半や、それに続く驗辞を検討して、幼の内容を考察することにより、ある程度明らかにすることができる。

丙 247 では、丁日か庚日に出産すれば吉と予言したが、実際の出産日は甲日でそのどちらでもなかったため、不吉を招き、その結果「佳女」とあり、これは生まれたのが女兒だとある。「不

幼」の意味するところは、女兒が生れてしまう、つまり男児が授からない、ということである。だとすると、「幼」は希望通り男児が生れて万事めでたし、という意味である。驗辞「佳女」の女字は、ト辞の用例においては極めて珍しい、男女の性別を表す用法であるといえる。この他、出産の吉不吉をあらわす語には、新生児の性別だけではなく、母体や胎児の健康安全も含まれていたはずで、続 4.29.3 の繇辞「𠄎希」にはそちらの含意があるかもしれない。

また、実際の出産日については、貞冥の日から実際の出産日まで、相当長期間にわたって日数があくことがあり、王室の想定を上回る長時間を経過してから出産に至る場合もあることが、丙 247 および丙 249 の驗辞および乙 4729 の繇辞からわかる。丙 247 は冥についてトしたのが甲申の日で、出産日については、十干を以てうらなうのみなので、予定日をいつ頃と想定していたか不明だが、実際の出産日まで実に三十一日もの日数が経過している。丙 249 は序辞と驗辞の干支から、貞冥の壬寅の日から、五十一日経過した癸巳の日に出産している。丙 249 と乙 4729 の貞トは、書体は別人の手によるものであるが、同日同一貞人が同一内容を貞トしたもので、これが別々の亀版に契刻されたものと考えてよいだろう。だとすれば、乙 4729 の繇辞において、貞冥の壬寅の日から、六日後の戊申の日または十二日後の甲庚の日などに出産日を想定するように、貞トの段階では、かなり早い時期に分娩があるものだろうと考えていたようである。ところが、丙 249 の驗辞にある通り、実際は五十一日も経過した後の、癸巳の日に出産したわけで、実際のお産は実に予測困難な事象であつただろうことがわかる。しかも、かくも予測困難な難事でありながら、二度とも男児は生まれてこなかったのである。

生育に関するト辞は、妊娠前に奉生ト辞があり、それに続いて妊娠を確認する受生ト辞があり、その後胎内の子が男児であるかを占う出子ト辞があり、最終的に、配妣の臨月が近づいた段階でトされるのが、冥幼ト辞である。このうち奉生ト辞には婦好の如く特定の配妣の名が記されることはないため、婦好の生育をめぐる



卜辞としては、受生が貞問された後に卣子が貞トされ、最終的に冥と劬が貞トされたことがわかる。卜辞において受生、卣子、冥と劬の全ての貞トが現れるのは、武丁の配妣の中では婦好だけであり、この点からも殷王室における彼女の立場の重要性が看取できる。

## おわりに

殷代社会にあって、王の配妣の重要な役割は、王の嫡子を出産することにあつたであろうことは言を俟たない。当然卜辞の中にも、生育に関する卜辞が数多く見える。これら卜辞の分析を通して、妊娠から出産まで約十ヶ月にわたる期間、その成否や新生児の性別などを対象として様々な貞トが行われていたことを、そのプロセスとともに明らかにすることができたと思う。生育をめぐる卜辞の辞例のうち、冥と劬についての貞トが最も数が多く、表現内容も多岐にわたる。そして、出産の際に新生児の性別についても「劬」「不劬」の語を用いて貞トされていたという点から類推すれば、妊娠が発生した「受生」の段階から「冥」に至るまでの半年前後にわたる相当長い期間中に、胎児が男児であるか女児であるかの性別を問う貞トが行われた可能性は十分にあるだろう。このことから、「婦好卣子」の「子」には性別を表す特別な含意があつたのではないかとの可能性が出てくる。つまり、ここでの貞問は、男児を懐胎したかどうかを占っているのである。胡厚宣は「卣子」の貞トは、「受生」があることがわかった後に、懐妊しているかどうかを貞問するものとしており、特に男女の性別については言及していないが、「劬」についての貞トがあれだけ頻繁に行なわれているところから、それに先立つ「卣子」の貞問にこうした含意があることはまず間違いないであろう<sup>32</sup>。

もともと「子」に男性の含意があることは、『春秋穀梁伝』僖公三十三年の、

乱人子女之教、無男女之別

人の子女の教えを乱し、男女の別無し。で「子女」「男女」いずれも連言して用いられるところにも現れている。ところが、金文には「子女」の対立はなく「男女」の用例があるの

みである。

其百男百女千孫（彣生盨）

男女無期（齊侯敦）

金文における女字の用例は、枚挙に遑ないが、その殆どが二人称代名詞で、汝として読む。また、母、むすめとして読む場合もあるが、「男女」と連言するのはごく僅かである。もともと金文で「男女」という概念が表現されることが稀であるためか、女字と比較して男字の用例は極めて少ない。「男女」以外の用例としては、

侯、田(甸)、男、(矢)令彝

の如く、侯や田(甸)と並んで爵位を表す名があるのみである。

さらに溯って甲骨文では、男、女いずれも奴隸をあらわす文字であつた。于省吾によれば、甲骨文における男は労働者を意味するという<sup>33</sup>。姚孝遂は、女俘を女と称したことを指摘する<sup>34</sup>。一般的に、男、女いずれももとは奴隸をあらわす文字であつたのが、後に人の性別を表わす文字として用いられるようになった点は興味深い。甲骨文「婦某卣子」における「子」は、生まれくる男児を指している可能性があり、また、駿辞「佳女」の「女」も、卜辞の用例においては極めて珍しい、男女の性別を表す用法である。甲骨文における生育に関する語の意味範疇を考えると、「子」と「女」が性別を表わす語として対立的に用いられているとも言えるのではなかろうか。金文における子が「子子孫孫」「王子、大(太)子、元子」「某子、子某」の如く、嫡子の意味を表わしているのも、この流れを汲むものであろう。この「子」について、字義的字形的に検討することは、単に文字学的な問題であるのみならず、殷代史と密接に関わる問題でもあるので、後日稿を改めて論じたい。

## 註

- 郭沫若『卜辞通纂』別録二、日本所蔵甲骨擇尤、1933年。
- 馬良春・伊藤虎丸主編『郭沫若致文求堂書簡』1997年、文物出版社。
- 金祖同『殷契遺珠』620。なお、合集番号は94。

- 4 青木木菟哉「書道博物館蔵甲骨文字」(一)～(五),『甲骨学』第6号～第10号,1958年～1964年。
- 5 謙慎書道会『日中書法の伝承』2008年。
- 6 羅振玉『殷墟書契考釈』中卷48頁,1915年。
- 7 董作賓「帚矛説」『安陽發掘報告』第四期,1933年。
- 8 郭沫若「骨白刻辭之一考察」『古代銘刻彙考續編』1934年。
- 9 唐蘭「積帚」『殷墟文字記』1934年。
- 10 中国社会科学院考古研究所編著『殷墟婦好墓』文物出版社,1980年。
- 11 曹定雲『殷墟婦好墓銘文研究』台北・文津出版社,1993年,119頁。
- 12 曹定雲注11前掲書。
- 13 郭沫若注1前掲書。
- 14 郭沫若注1前掲書。
- 15 姚孝遂「商代的俘虜」『古文字研究』第1輯,1979年。
- 16 羅琨「商代人祭及相關問題」胡厚宣等編『甲骨探史錄』北京・生活讀書新知三聯出版社,1982年。楊升南「商代人牲身份的再考察」『歷史研究』1988年第1期。
- 17 英国750。
- 18 李学勤「統釈“尋”字」『故宫博物院院刊』2000年第6期。
- 19 松丸道雄「河南鹿邑縣長子口墓をめぐる諸問題」『中国考古学』第4号,2004年。
- 20 陳夢家『殷墟卜辭綜述』494頁,1956年。
- 21 胡厚宣「殷代婚姻家族宗法生育制度考」『甲骨学商史論叢初集一』,1944年。
- 22 陳夢家注20前掲書,162頁～164頁。
- 23 楊育彥『甲骨文合集分類分組總表』,藝文印書館,2005年。
- 24 陳夢家注20前掲書,494頁。
- 25 郭沫若注8前掲論文。
- 26 唐蘭『天壤閣甲骨文存考釈』60頁,1939年。
- 27 郭沫若『殷契粹編』1937年。
- 28 荒木日呂子「積𠂔幼」『東方学』第69輯,1985年。
- 29 金祥恒「積𠂔」『中国文字』45,1972年。
- 30 胡厚宣注21前掲論文。
- 31 李孝定『甲骨文字集釈』1965年。
- 32 胡厚宣注21前掲論文。
- 33 于省吾「積𠂔男」『甲骨文字集釈林』1979年。
- 34 姚孝遂「商代的俘虜」『古文字研究』第1輯,1979年。

图 1

中村獸骨正面摹本

65%

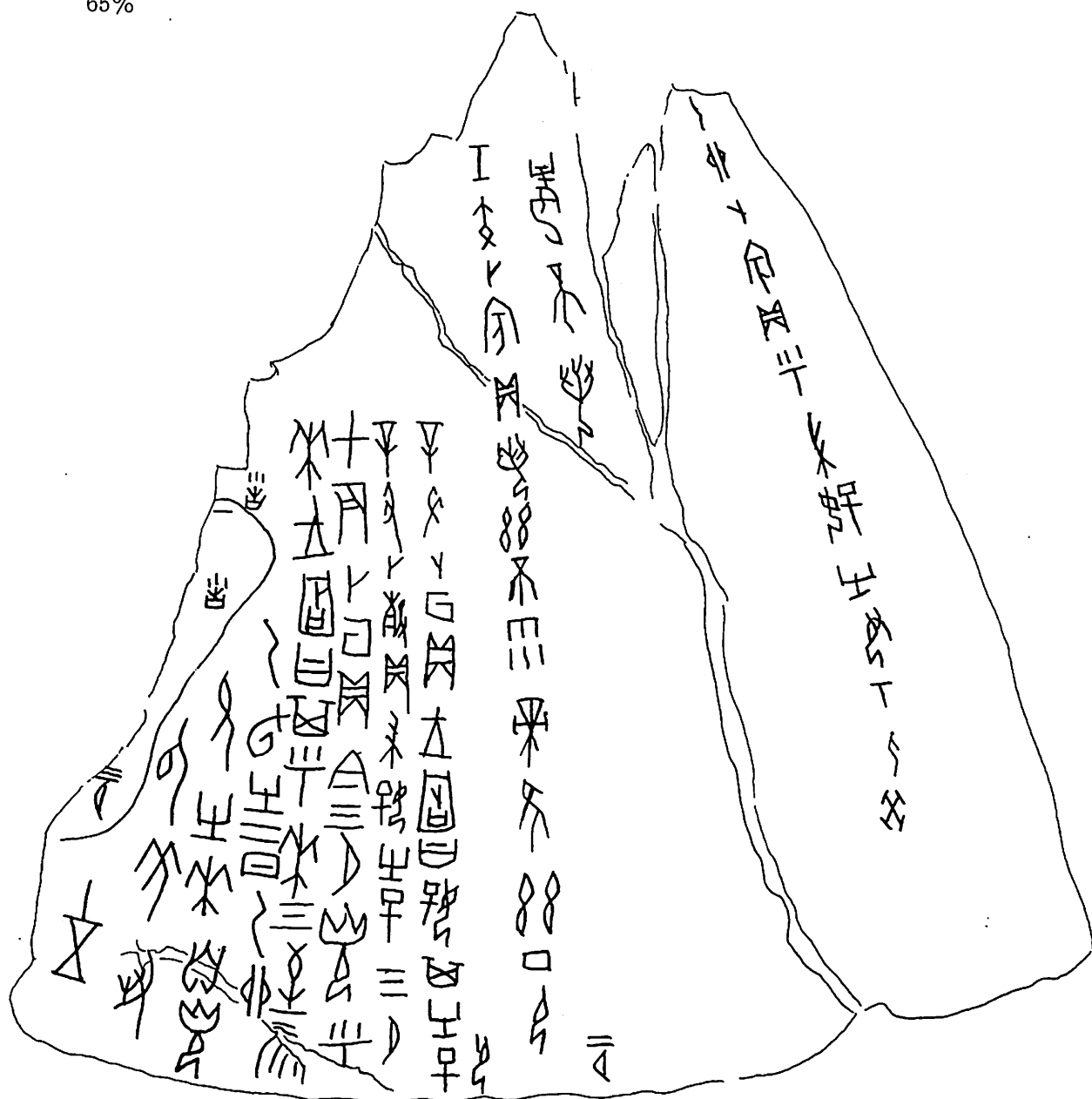


図 2

中村獣骨背面摹本

65%

